

## パネリストによる問題提起

本学政治学科OB 荒木 男

皆さん、こんにちは。私は今年の三月政治学科を卒業しました荒木男と申します。そちらを見ていただければ分かると思いますが、ダンは「男」と書きますので、先ほどから、いろいろな先生方に「本当にこの名前か？」と言われたりもするのですが、本当に本名ですのでよろしくお願いいたします。

話の前に、私がなぜ政治学を大学で受験するに至ったかということなのですが、高校二、三年のときに、日曜日の朝に家で政治討論番組を見ていたのです。そうしたら、政治家が熱く、ある意味人のため、他人のため、いうならば国のために、熱く議論を交わしている姿を見まして、私は高校まで人の上に立って、人の世話をする世話好きな人間だったものですから、非常に感動しまして、大学受験の際、将来を考えたときに、政治家というのは非常に魅力のある職業だなということ、その時以来、政治家というものを意識し始め、受験ですから大学受験の受験資料をいろいろ読んだのですが、その受験資料の中で「政治学とはどういう学問か？」というところに、「現実的に人をどう動かすか」ということが書いてありまして、まさにピッタリなテーマだなと思い、私は政治学科を受けるしかない、と決意いたしました。大学受験は政治学科一本で受験させていただきました。高校時代、生徒会活動などに、はまり込み過ぎたものですから、一浪しまして、浪人時代も政治学科一本でやりました。一浪したおかげで、この大東文化大学政治学科に入らせていただきました。なぜ、一浪したおかげかと言うと、私が入学したときから、政治学科のカリキュラムが新しくなりました。九五年の入学なのですが、ガラッと政治学科のカリキュラムが変わりまして一年次から、ゼミナールの入門編、二年になると基礎編、二年次の基礎演習では壇上にいらっしゃいます黒柳先生のゼミを取らせていただいて、基礎演習という

ことでさせていただきました。まあ、ゼミだけでなく、情報処理科目の勉強も一年次から出来るということで、ただ、抽選であったもので、ハズレたりもしたものですから、「なぜ、受講できないのだ！」と大学側に文句を言ったら、二年次の履修登録で落ちたら考えてあげる、と言われたりもしました。このように新カリキュラムにおいては科目の選択の幅もありまして、ある意味一浪したおかげで、このシステムで学ばせてもらうことができました。三〇四年生次の通常のゼミでは、こちらにおられる加藤先生のゼミで、ゼミ員四人で、加えて加藤先生の留学期間とも重なって短期集中で一週間二回という非常に大変ではあったのですけれども、一週間発表すれば次の週の本をすぐ図書館に行って借りにいかなければならないという状況で、四人の中で一生懸命やって、本を読み込む力がついたと思います。今まで、本というものになかなか近づかなかった人間だったものでしたから、非常に、本を読む訓練が出来て良かったと思います。そんなところが、大学での政治学科の印象ということになります。

では、なぜ、私がいまこの秘書という仕事をしているかといいますと、先ほどお話させていただきましたように、政治家という職業に憧れておりまして、大学に入ってから、政治家の選挙の手伝いをしてみたい、という希望がありました。て、どうすれば良いかという方法がなくなっていて、いろいろ探しているときに、たまたま私が入っていたサークルの先輩に、今私が所属している小林事務所の方がいます、飲み会で名刺をいただきまして、まさにこの人しかいないと考えました。ちょうど平成八年に衆議院の解散、総選挙がありました、その方にお願ひしたら、「猫の手も借りたいくらいだ」ということで、学生なら誰でも良いから手伝いに来い、ということでも衆議院選挙のお手伝いをさせていただきます。選挙期間中の一二日間しかお手伝いできなかつたのですけれども、衆議院の候補の先生と一日中、自転車でいわゆる「銀輪部隊」というやつですけれども、選挙区内を「お願ひします、お願ひします！」と走りまわるのをやらせていただきました。おかげさまで、当選させていただいたのですけれども、その後、事務所でなにがしかのお手伝いをで

きないかな、と思つていたところ、選挙期間中の銀輪部隊での私の大声が買われまして「荒木、ちよつと来い！」というところで、代議士から「やつてみないか！」ということでも有難い依頼をいただきまして、事務所に学生時代からお手伝いをさせていただきました。

そこでいきなり、衆議院のお手伝いをするのかなと思つたら、その後、平成九年の七月に都議会議員選挙があるというところで、ある都議会議員の方の事務所にいきなり行けと言われ、小林事務所に入ったつもりがその都議会議員の先生の事務所へ飛ばされました、衆議院の選挙の時は学生アルバイトだったのですが、今度は人手もないということ、学生秘書ということで地域の担当をしなさいと言われて、新宿区の四谷周辺を担当地域として与えられて、その中の戸別訪問から様々な選挙のお手伝いまで、学生のアルバイトとしてではなく、本格的な秘書としての仕事を与えられました、そこで半年間やらせていただきました。おかげさまで、その選挙もギリギリではあったのですが無事に当選させていただきました。そして、学生の四年のときに小林事務所に戻りまして、今度は小林事務所の方で、地域担当秘書だった方が辞められるということで、「荒木、卒業してないけれども本格的に秘書をやらないか！」ということ、お話をいただきました。ちよつと就職活動を前に控えた時期でもあったので、非常に悩んだのですが、浪人していたときの予備校の恩師に相談に行つたところ、「人生の中で、そういうたあたりがたい出会いは何度もあるわけでは無いよ。若いうちだから何でもやりなさい」と言われました。他の方からは「民間企業に入つて普通の社会勉強をした後でも、政治の世界には入れるよ」とも言われ、そちらの意見の方が多くて非常に悩んだのですが、予備校時代に私の心の部分までよくわかつていただいた方にその一言を言われた瞬間に、私は決心いたしました。就職活動もせずに、四年のときにこの事務所に就職させていただきました。それで今、秘書として二年目を迎え、現在に至っております。

そして、今日、先生方のお話を聞かせていただいたのですけれども、まず松下先生のお話なのですが、聞いていて先

生の地方分権化の流れの、ある意味、理想というか目標のことを語られていたのですけれども、私としては非常に心の痛む、まったく国会議員による官僚への圧力活動、まさにその手伝いを今してしまっていて、先生の理想を聞きながら、私は現実で中身をいろいろチェックしてみました、本当にそういった世界になるのかなということ、私はその狭間のなかで悩みまして、また非常に良い勉強になりました。やはり、黒柳先生のゼミの中でも勉強させていただいたのですが、世の中には何事にも理想と現実というものがあると思うのです。その両方が大事だと思うのです。現実をいかに把握して理想に近づけるか。また、現実だけでは発展は望めないのです、理想も絶えず持ち続けなければいけない、ということ、黒柳ゼミのときにいろいろ教えていただいて、物事を多面的に見ることが大事だ、ということをお教わっていたものですから、今日お話いただいたように、これから理想に向かって、現実を見極めながらやっていきたいと思っております。

私が、大学二年のときに考えていたことなのですが、政治学が実際の政治にいかにかかされているのか、またいかに生かすべきかを思っていました。その後、四年間政治学を学んで政治家の秘書になってみて、その感想というのは、役立つところと役立ててないところがあるということです。いろいろ考えるところがありますが、現在秘書活動を行っている、先ほど松下先生の講演で触れられていた「エゴイズム」の話なのですが、「エゴイズムなきところに発展はない」と言われていたのですが、私は秘書活動をしていまして、まさに「エゴイズム」の受付係と言いますか、「お客様苦情係」みたいな感じであります。私は現在、小林代議士の選挙地盤である練馬区の三分の一の、そのまた三分の一を私が担当させていたいただいています。簡単に言ってしまうと、企業の営業、もしくはよく銀行員の方にお会いしたりするのですが、その銀行員の外回り、まさにそれと同じでありまして、オートバイ一台を与えられていまして、それで選挙区内をグルグル走り回っております。その中で、先ほど言われておりました「エゴイズム」の受付ですか、いろいろな方からいろいろな事を言われております。そんな中で、先ほど学生の方から質問がありましたし、私も大学の講義で聞いた「地元

利益誘導政治」の批判というものが言われていますが、ある意味では偏った、自分の小林代議士の支援をして下さる方のエゴを聞きに行く、支持して下さるからこそ聞きに行くみたいなことを、他の秘書のみなさんがやっているのを初めは見えていて、はたしてこれで本当に良いのか、こんなことばかりをやっている、ある偏った人のためだけにやっている、はたして国の発展になるのか、と思つてはいたのです。やはり、そういった時に、「エゴイズムなきところに発展はない」という松下先生の今日のお話を聞いて、「本当にそうだな」とあらためて確信しました。何が言いたいのかというと、プラスになることだということです。私が秘書活動をしていて、今日の話聞いた途端にやる気が出まして、明日から何でも聞いてやろうと、エゴイズムなら何でも受け付けて役所にぶつけてやろうと思いましたが、私は、よく練馬区役所に行かせていただきますし、東京都のことであれば、都庁の方に直接行かせていただくのですが、政治家の秘書の凄いところは、名刺を出せば必ず応対してくれる、必ず奥の部屋に通され、役人と直接お話しができることです。私自身も中身の蓄積がないと、対等に話せないものですから、事前に勉強して予備知識を持って話を聞きに行っています。そういった意味で、これからもますます勉強して、地域の方のために頑張つて行きたいと思っています。

あと一つ、言わせていただければ、私の仕事で政治学が役に立たないと言え、役に立たないことがあります。それは何かと言え、時節柄、いま忘年会、新年会の季節だと思つのですが、私が担当している町内会、商店会、老人会もしくは各種団体、組合の忘年会に参加させていただくことが多いのですが、そういった中で、私が今まで学んできた政治学の話その方達とお酌をしながら話しても、皆さんの支持は得られません。現実に、何を話しているかと言え、世間話です。秘書というのは、いかにその皆さんの心を掴むか、心を掴んで小林代議士に対して支援をいただくかという作業の連続ですから、一般的に言つて、政治学の話は出来ないものです。これから忘年会、新年会シーズンを迎えるにあたり、まったく役に立たないわけです。でも、たまに政治もしくは政治学に関心のある方がいらつしやいます

て、その時は今まで蓄積したことをフルに出せますし、逆にそれを持っていないと、相手から「何も勉強していないじゃないか」と責められます。そういった方のためには、一つだけの方法ではなく多面的なところから相手を説得する能力というのを政治学を四年間学びながらつけさせて頂いたので、そういう意味では政治学は実際の政治にプラスになることであると思います。

最後に、皆さんに向けてメッセージなのですが、こちらに三、四年生もしくは一、二年生がいらっしやると思うのですが、私が大学で四年間過ごして感じたことは、やはり安先生も熱く語られていたのですが、大学で学ぶ上で、特に大東文化大学で学問をしている以上は、世の中の役にいかに立つかということ、考えるべきだと思うのです。先ほどの話のように法律の専門家でも結構ですし、そうでなくてもいろいろなところで役に立つべきだと思うのです。どうしたら良いかと言うと、大学四年間でただ授業に出るだけでは真に役に立つ人間にはなれないのではないかと思うのです。私は浪人時代から「大学に入ったら絶対本格的に勉強してやる」という決意があり、一年目の授業完全出席しました。土曜日にも英語の必修があったので、週休一日、月曜日から土曜日まで授業ということで、高校より厳しい毎日が続きました。二年目に、これで良いのかということ、サークル活動もやらなければいけないのではということ、半分サークルに時間を割きました。三年目になりました、先ほど述べましたように、衆議院の解散・総選挙もあったものですから、選挙のお手伝いをさせていただいたこと、三年の前期はほとんど出席していませんでした。それが良いか悪いかは別として、私が言いたいことは、やはり大学に在る間に外に出てほしいのです。何でも良いのです。いろいろなところ、アルバイトでも何でもあると思うのですが、そこで社会をまず見る、それを行うことによって、実際に社会に出て自分の能力として何が足りないかということが、その時にわかります。それを大学に帰ってきて、補えば良いのです。それを大学の四年間、ずっと学校にいて、就職して外に出れば良いかといえ、そのときに足

りない能力に気がついたとき、その時ではもう遅いのです。やはり、大学四年間のうちに、いろいろなところに出て、自分が将来何になりたいかを含めて考えて、そして必要な能力、不足している能力を認識して、そこで大学に帰ってその能力の育成に努めていただければ、本当に世の中の役に立てる人間になれるのではないかと思います。私は、大学四年のときに就職して、大学と職場を行き来しまして非常に痛感したことでありましたので、皆さんに強く訴えておきたいと思います。どうもありがとうございました。